

シリーズ隠れた建築紹介 (旧)入善町立柗山小学校  
~小学校にかけた地区民の熱意~

—木造校舎は地元の誇り—

旧柗山小学校は入善町でも現存する最後の木造校舎で、旧柗山村の一大事業として取り組まれ、当時の最高技術を結集して建てたというだけに文化財調査の専門家からもその建築意匠と歴史的価値が高く評価されている。

校舎の改築は当時の柗山村の最重要課題で子供達の成長を願い、立派な学校を建てようと地元の人たちは家の財産ともいうべき屋敷林のなかから一番いい材質の木を伐って学校に持ち寄った。

工事を担当した大工棟梁達もそんな心意気に惚れ、生涯一度の大仕事として意匠を研究し、精魂込めて腕を奮った。資材検査や施工管理が厳密に行われ、関係者の並々ならぬ努力で他に類を見ない堅牢で優美な校舎が昭和7年の秋に落成した。

これまでに天井や廊下、板壁の一枚一枚を丁寧に繕いながら、大切に守ってきた。そんな気持ちに応えるかのように、この木造校舎は半世紀以上もの風雪に耐え、数多くの卒業生を送り出してきた。

—学校は地域の象徴、保存と活用を—

現在、地区公民館の新築に伴ってこの木造校舎の取り壊しが問題になっています。

町の宝である木造校舎を何とか残したいと、地元有志が「柗山小学校を考える会」を発足させ、校舎や跡地をどのように利用していくのかを本音で話し合う機会を持つとするもので、これまでに校舎の見学会や保存と再生を考えるセミナー等を開催し、住民の関心を高める努力をしています。

旧柗山小学校の木造校舎は郷土の誇りと、地域文化を伝える貴重な建築文化財で、こうした建築物を簡単に壊せば、先人の優れた技術や意匠ばかりでなく、本来伝承す

べき知恵や心まで失ってしまいます。

あと30年で学校は築後100年になります。現在では新川地方にたくさんあった木造校舎もこれしか残っていません。地区民の総意で建てられ、地区の歴史を伝え、誰にでも自慢できる立派な校舎だから是非とも保存と活用を考えるべきだと思います。

学校はいつの時代もまちの顔であり、地域の象徴である。

—スペースデザイン研究所主宰 石塚 兼治

北陸支部インフォメーション

■ 2000年度 日本建築学会北陸支部総会等企画

日時：2000年5月29日（月）  
会場：フェニックスプラザ（福井市田原町1-13-6）  
次第：

- (1) 役員会・昼食会（館内4階404号室）  
12時30分～13時30分
- (2) 通常総会（館内地下 大会議室）  
13時40分～14時40分
- (3) 記念行事（館内地下 大会議室）  
講演会 15時～16時30分

講師：上谷宏二（京都大学教授・本会副会長）  
演題：「性能設計時代に向けての構造設計の論理化」  
展示会：1999年度支部共通事業設計競技入選作品展

■ 2000年度支部大会の日程

日時：2000年7月28日（金）、29日（土）  
内容：大会、作品発表、懇親会、シンポジウム、見学会  
開催場所：長岡造形大学 ほか



日本建築学会北陸支部ニュース「AH!」第18号

発行日 2000年5月18日発行  
発行 日本建築学会北陸支部広報部会  
伊藤 晋栄（新潟） 尾久 彩子（富山）  
西山マルセロ（長野） 池本 敏和（石川）  
野嶋 慎二（福井） 石川浩一郎（福井）  
事務局 室田 文男・瀬口さゆり  
〒920-0863 金沢市玉川町15-1、パークサイドビル3F  
TEL&FAX 076-220-5566



特集  
地域、伝統、風習



左上：武生市蓬萊町の町並み  
左下：武生市蓬萊町の蔵  
右上：石本茂雄設計「可動クリーンエコトイレ シスレット」  
右下：京町地区街なみ環境整備事業

支部ニュース「AH!」の第18号をお届けいたします。今回の座談会は「地域・伝統・風習」のテーマのもとに福井支所のお世話でとりおこなわれました。

さて、本広報部会ではHP (<http://www.anc-d.fukui-u.ac.jp/~ishikawa/AIJ-hokuriku-shibu/koho-bukai.htm>) を開設しております。まだ、ご覧になっていない方はぜひとも見ていただければ幸いです。第16号からの「AH!」、北陸支部の新着インフォメーションを閲覧することができます。「AH!」の発行が年2回に減りましたので、HPで補っていきたいと考えております。HPに組み込む新しい企画、ご意見等頂ければ幸いです。

# 地域・伝統・風習

2000年2月25日武生市「桃李」にて

今回「地域・伝統・風習」というテーマで座談会を福井で開催するには、歴史が古く、戦災や震災での被害もなく、今でも古い町並みを残す武生がふさわしいと考えました。そこで武生に住まれ武生で活躍されている方々にお集まりいただき、日頃お考えになっていることをお聞かせいただきました。メンバーは、武生の蓬萊町で蔵を活かしたまちづくりをコーディネートされている建築家の石本茂雄さん、建築家で武生の町家の実態調査をされている小川利男さん、意欲的に木工(家具・建具)製作に取り組んでおられる横田利宏さんです。そして福井大学で日本近代建築史を専攻し建築設計も教えておられる高嶋猛さんに進行役をお願いしました。

会場は、石本さんが関わっている蓬萊町で、蔵を改修して出店した「桃李」です。

## ひっそりした武生の文化

高嶋：まずこのテーマからしますと武生とはどのような町なんでしょうか。

石本：武生のように1300年以上続いてきた町はそうないんじゃないでしょうか。一時期脚光を浴びてその後落ち込む町はよくあるけど、武生は歴史が途切れずになだらかに続いている。だから文化があるのではないのでしょうか。しかしその文化は京都の文化が北陸に入っていくときにここで落ちていったもので、京都文化の縮小版です。金沢みたいに自分で創った文化は少ないんです。

高嶋：金沢のように目立つような華やかさのあるものだけが文化とは言えないんじゃないでしょうか。武生のように華やかさはないが目利きの人が多くいるという文化だと思うんです。

小川：いろんなしつけやしつらえなど文化的歴史がたくさんあるんです。神社仏閣やお祭りなど、今まで蓄積



蔵を利用した中国料理店「桃李」(座談会会場)

してきたものを由として次の世代に残すのか、変えていくのが問題なんです。

石本：伝統とは守る物でなく、攻める物。例えば100あったとしたら、そのうちいいものを60受け継ぎ、40削って100にしていくこと。100をそのまま受け継ぐのは伝統ではないと思います。

だから戦後、街路にある水路と松並木を壊したのもしかたないことだと思う。全部壊したのはまずいけれど。壊した分だけ次の世代で何を創るかが問題なんだと思います。

高嶋：新しいものと古い物の世代交代はわれわれの責任です。残すべきものを選択して残しているか、なりゆきでやっているかが問題です。武生は足がかり(歴史・文化)になるものがあるから考えられるんです。その価値判断で残すべき物を決めていきます。ところで残すときにネックになるのは古くからの伝統でしょうか他のものでしょうか。

石本：一番は人的なネックで伝統はネックにはならないと思います。また人的な面でも武生は行政も市民もそれなりに評価できると思います。人口も全国的にみても地方のこの規模の町の多くが減少している中であって継続している。ポリス的感覚があるからでしょうか。自分たちのまちという意識があれば続いていくんだと思います。

小川：足がかり(歴史・文化)ということからすると武生はぜいたくなんだと思います。ぜいたく過ぎて人は認



石本 茂雄設計・町家を改修したブティック



横田 利宏デザインの椅子「抱桐(ほうとう)」



石本 茂雄さん



小川 利男さん



横田 利宏さん



高嶋 猛さん

識していないんじゃないか。はおりの裏に凝ると言う感覚ではなく、無理にめくり挙げられるまでそう簡単には見せられないという意地、有る意味では卑屈なところがあるんです。

横田：そういう意味で東京の下町と武生はよく似ているんじゃないかと思えます。仕事の仕方についてもそうですが、木工の細かい仕事は昔は座って仕事をしたんですが、今はどこも立ち仕事で、座ってするのは武生と東京下町くらいです。気質も同じでこれみよがしではなく地味だが「りん」としたものがあります。

小川：たしかに関西ほどこってりしたところは少ないと思えます。

横田：東京の文化はすごいと思えます。手仕事の分野でも一番すごい職人がいるのは東京。というより東京のあそこ、あの人。施主からはきびしい注文を受け、職人はそれに応えるための道具を注文する。東京にはそれに応える職人がいる。道具が仕事をするんで手がるのではないんです。

高嶋：それは謙遜では。

横田：しかし東京の悪いところばかり地方に伝わってし



「桃李」2階にて

まいます。いいところや文化はひっそりしていて、東京に深く静かにあるんです。武生にも静かでひっそりしたものがあります。

## 施主と職人

横田：木工の仕事でも、昔の施主は木の性質を良く知っていたんです。下職はお施主にまけたらいけないと思って勉強したんです。つまり施主に育てられてきたんです。

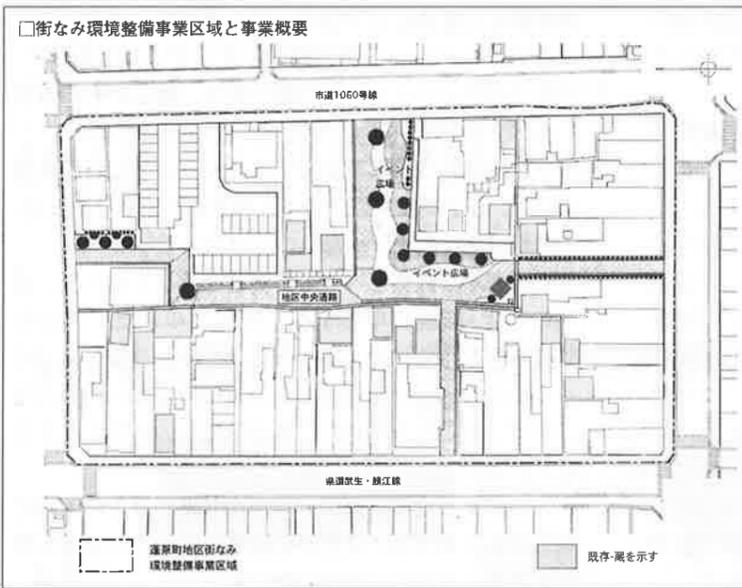
施主につつまれたりおだてられたりして職人は踊る。今の施主は「詳しくないですからお願ひします」と言って職人にまかせている。それで職人も自分の都合のいいことしかしなくなりました。

石本：建築と庭は素人さんも目が越えている。お客がびりびりしているといいんだけど、そうでないとお互いにレベルが落ちてしまうし、そうすると文化全体が落ち込んでしまいます。今は客がいいものを見る目がなくなってしまった。

高嶋：なぜ見る目がさがったのでしょうか。

石本：ふしん道楽する人がいなくなった。

横田：ふしんは楽しんでやるものだったんです。完成したものを評価するだけでなく工程を楽しんでいた。細部の美感、材の使い方など施主との真剣勝負がおもしろかったんです。今の施主はゼネコンまかせ



蔵を利用したまちづくりが進行している蓬萊町の計画図(蓬萊地区再生事業推進協議会パンフレットより)

で楽しいところを取られています。

小川：家は家族の砦でもあるんだけど社会との接点でもあるんです。かつては家でお客を呼び、お茶事ができた。家でお茶事ができるから道具やしつらえや掛け軸が必要だったんです。例えば、ある家で鳥が左を向いたいい掛け物があったんです。その掛け物のために、左側に書院があるしつらえをしたんです。施主がこのような人を楽しませるこだわりがあっておもしろくなるんだと思います。

横田：最近は見るとある人がお金を使わないし、家も建てない。

石本：でも武生は他に比べて文化的な面はまだある方です。焼き物、絵、掛け軸など子供の頃からいい物見ている人は目が肥えている。そういう人がまだ武生にはいます。

高嶋：規範、たたき台のような伝統が武生にはあるんでしょうか。

### 混在か統一か

高嶋：小川さんの家は町家でアプローチがない。昔は通りがアプローチの役割をしていたけど今はその感覚がなくなっていました。石本さんが関わったこのまちづくりはそのアプローチを街区の中に創ろうと思ったのでしょうか。昔の通りの意識があってそれを復活しようとしたのですか。

石本：その感覚は特にありません。ただ昔からあるものを極力使っていこうと思ったんです。

小川：蔵のある町といっても武生の蔵は本来奥にひっそりある蔵。それが表に出てしまったから蔵を持っていた人にとってつらいことでもある。上質なものもあるが、そうでないものもあるからです。武生の蔵は川越のように土蔵づくりを見せる蔵ではないのではないかと思います。

高嶋：異質なものを(蔵)を使って計画されたのは伝統を再現しようとしたのか新しいものをつくらうとしたのでしょうか。

石本：ここでは今より少しでもよくなればよいという意識でやりました。デザインなどの哲学やきれいな意識はないが、おもしろさは意識しました。裏通りの路地など、今まで体験できなかったものをごちゃまぜで創ろうと思いました。町とはごちゃまぜでいい。いつの時代も半分くらいあわなくても仕方ないと思うんです。

横田：日本人は統一されすぎると気持ち悪く、少しはずれたものに美しさを感じるんだと思います。今の家づくりも全て同じで気持ち悪い。様々な時代の建築があってまち全体として美しくなるのだと思います。

小川：街並み調査をやっているんですが武生の旧町内に



小川 利男 武生の町並みを調べる会による町家調査(撮影/福井新聞社)

は伝統的町屋が47%残っているという結果が出ました。武生は町家が全域に広がり、平均的レベルが高いんです。それをいかさない手はないと思います。

横田：せっかくだいい麻や綿の着物を着ていたのに上にビニールを着たようなものです。当時は新しいものに写ったでしょうが、もう取り払う時期です。

小川：建築は本来意図された姿で使うのが一番いいと思います。

高嶋：新しいものをつくるのか伝統を延ばすのか。武生はこれからどう受け継ぐべきでしょうか。

横田：町家とか古くていい物が残っていくには、みんなこれはいいねえとほめることが必要なんではないでしょうか。住んでいる人には良さがわからないものです。みんなが「いいなあ」というと「それじゃあきれいにしようかな」と思うし、残っていくんだと思う。大学や設計事務所、都会の人や外国人が一軒一軒ほめてあげることそしてその方向性を示してあげることが大切なのではないでしょうか。

小川：受け継いでいくとき大切なのは、基礎となる美意識を底上げすることではないでしょうか。武生としてはこのくらいという美意識のスタンダードがあって、始めてバリエーションが可能であり、新しいものも古いものも発展すればよいのではないのでしょうか。

石本：建築は総合的なものです。だから大学などの教育により、総合的に判断できる人材を送り出して欲しい。それが文化の底上げになるのではないのでしょうか。

高嶋：皆さんが武生という町に愛着を持っておられ、武生の文化・伝統の中で子孫に残してゆきたいものをつしっかりお持ちになっていることがわかりました。そしてそれらの良さを発見し、人々に伝えていく努力をされていることを伺い、これが伝統なのかなと考えさせられました。

今回の座談会で、武生の町の持つ奥の深さの一端に触れることができ、文化や伝統を考える上で貴重な町であることを改めて認識しました。

本日はありがとうございました。

### 通船川・栗ノ木川下流再生市民会議

新潟市は昭和30年代の中頃まで堀割が縦横に存在し水辺に柳の影を落とし水の都にふさわしい情景があり柳都とも言われていた。現在、堀はすべて埋められ堀の呼び名がそのまま道路名になっている。例えば、一番堀通り、東堀通り、西堀通り、といった具合である。

そんな新潟市に信濃川と阿賀野川、二つの大河が、わずかに水郷の面目を保っている。その大河を結ぶ運河が新潟市の東部を流れる通船川である。享保15年(1730)阿賀野川は信濃川の河口部に合流していたが、日本海に近い松ヶ崎から水位調整と治水目的の堀割を通した。

しかし翌年の雪解け水が大洪水となって堀割を一気に押し広げ本流となり残された約8.5kmの川道跡が通船川である。以後、自然に逆行した人為的数奇な運命と莫大な公共投資で維持されてきた。特に、平坦な新潟平野は、川が川の道として栄え沿川の人々は暮らしの中で様々な付合をしてきた。また、川ガキには格好の遊び場でもあったが新潟地震(昭和39年)後、排水河川となり近寄れない汚い、臭い、危険な3K河川となった。

平成2年から始めた「甦れ、ふるさとの川、通船川」の活動は、河川法改正によって今、明るい展望が見えてきた。平成10年「通船川・栗ノ木川下流再生市民会議」の発足を契機に流域住民・企業・専門家・市民



市議会のメンバーによる通船川カヌー下り

団体・行政の参加型「パートナーシップ」による川づくりである。

川の再生が論議され、ワークショップによる共通認識、そこから基本プランを作成し市民会議で合意形成を構築していく手法である。平成14年度には一部ではあるが完成する部分もある。やがて上流から下流まで自然が甦り生き物が再びこどもたちの遊び相手になる、そんな通船川が見えてきた。

一通船川ルネッサンス21  
代表 星島 卓美

### 喫煙コーナー付きランニングコース

中年オジンが感染する病気に、マラソンというのがありまして、昨年47才にして走り始めて1年弱。



富山市体育館全景(パンフレットより)

今年は4つのレースを予定しています。最近、職場の近くに富山市の新体育館ができて、主な練習場として利用しています。「ランニングコース」はロビー兼用ということでもあり、内壁のコンクリート地肌には木目がやさしく浮かび、ガラスのオブジェがあり、イタリアの職人の手になる漆壁がありシャワールームが充実しており、厚手のタイル絨毯はランナーの膝への衝撃をやわらげる、なかなかの練習場です。「走る」という、ここがまったくの空っぽになる、至福の時間を数十分過ごすことができます。ああ、シアワセ。と思っていますと、コースの一面に喫煙コーナーが設置されています。私は喫煙者の権利も守ることをまず宣言しつつ、このような設計を依頼し、設計し、図面も描き、かわりをもたれた方々の豊かな想像力に脱帽いたします。12kmを過ぎる頃から脈拍は上昇し、ゼーゼーあえぎながら1周330mごとに青い煙を吸うアスリートを想い浮かべよ。

私は建築の専門家ではなく、アスリートでもないただの利用者ですが、「環境にやさしい建築」「豊かな空間を演出する」..などのいかにも文化的な表現そのものにあきあきし、うさんくささを感じています。それらはテキストらしきものをこねあげる記号の消費的な羅列でしかないのでは？近親者で文化討論をされることもけっこうですが、竣工し消費される建築物の「修正」はむずかしいのでしょうか？むずかしいから学会があり、プロの方々がおられるわけですし、この際、次々と建設されるばかばかしい色彩の巨大スーパーマーケットや、音楽を聴く気にならない文化ホール(入善町のホールは例外です)を破壊修正するプロレタリアートの出現は無理としても、少なくとも、ランナーの声を聞いて、あそこに煙吸引装置をつけてもらいたいなあ。行動する建築関係者よ、出よ。君がやらんのなら私がやるけどね。

一高岡市 小林 敏一(プログラマ)

雁木の街 上越市高田 どの街にも宝はある。高田の街の宝は雁木である。

**GANGI**

日本一長い1位高田・2位長岡・3位栃尾。松平忠輝によって1614年以降に整備。"造りこみ雁木"と"落とし雁木"がある。この保存と景観の保全が今求められている。

### 台湾集集地震 断層近傍の建物被害

昨年9月21日に台湾の中央部(集集镇付近)を震源とするマグニチュード7.7の地震が発生し、死者2,000人を超える甚大な被害が生じました。

今年1月4日から9日までこの地震の被害調査に、金沢大学地震防災研究室の調査団員として参加する機会を得ましたので、その概要についてご報告します。

台湾には現在確認されているだけで51カ所の活断層があるそうです。その中の車籠埔断層が今回の地震の起震断層であると考えられています。断層運動としては、断層の東側が隆起した逆断層タイプの破壊で、断層の鉛直変位は2~6m、出現した断層の長さは、約80kmにおよぶとされています。

今回の調査では、主に断層近傍の建物被害を見て廻りました。写真は建物の中央に断層崖が出現し、地盤の隆起に伴い建物の西側(左側)の直接基礎が露出している様子です。ここでの鉛直変位は、約5mでした。つまり、地盤が5mも隆起したことになります。この建物のように断層直上の建物で残っている建物は少なく、ほとんどが解体撤去されておりました。また、写真の左側に見える建物は、断層のすぐ横にあるにもかかわらず、クラックや建物の傾斜も全く見受けられない無被害の建物でした。このように、断層から少し離れることで被害を免れている建物は多く見られ、断層近傍の建物被害は、地盤の振動による被害というよりも地盤変位による被害が顕著でありました。隆起した上盤側の地盤が側方流動や斜面崩壊を起こして被災するケースが多く見受けられました。



写真は建物の中央に断層崖が出現し、地盤の隆起に伴い建物の西側(左側)の直接基礎が露出している様子です。ここでの鉛直変位は、約5mでした。つまり、地盤が5mも隆起したことになります。この建物のように断層直上の建物で残っている建物は少なく、ほとんどが解体撤去されておりました。また、写真の左側に見える建物は、断層のすぐ横にあるにもかかわらず、クラックや建物の傾斜も全く見受けられない無被害の建物でした。このように、断層から少し離れることで被害を免れている建物は多く見られ、断層近傍の建物被害は、地盤の振動による被害というよりも地盤変位による被害が顕著でありました。隆起した上盤側の地盤が側方流動や斜面崩壊を起こして被災するケースが多く見受けられました。

現地では断層崖を目の当たりにすると、断層直上の建物を構造的に守ることは非常に困難であると実感しました。米国カルフォルニア州では断層から一定の距離には建物が建てられない法律が定められているそうです。日本における、断層変位に対する対策は今後の課題と言えそうです。

— 真柄建設株式会社 安田 衛

### 市民参加型祭りで街を活性化

昨年7月31日第46回福井フェニックス祭りの中で、第1回YOSAKOIイッチョライ大会が開催された。この大会は、高知のよさこい祭り札幌のYOSAKOIソーラン祭りを福井流にアレンジしたもので、参加8チーム・出場者550名・観客動員数5000人を集め、大成功で幕を閉じた。

出場各チームは、30人から100人で構成されている。福井の民謡いっちょらい節を現代風にポップにアレンジした曲によって、手には鳴子を持ち、それぞれの衣装をまとい踊った。踊った人達は、喜びと感動を得、また、見る者にも感動を与えていった。市民参加型の民謡現代版のパワーを感じた。

演技場所は、中心市街地の道路上で踊り、観客は歩道で見ています。いつもは車中心の中心街が、この日は人の歩行者天国として生まれ変わる。つまり、自分たちが作り出した非日常的空間が、人々を楽しませているのである。

この祭りは、中心街を市民が活性化していく、一手法となった。今後も拡大していき、福井らしい祭りが生まれ、中心街の活性化が望まれる。



\*YOSAKOIソーラン祭りは、1991年8月に始まった。1人の学生が高知のよさこい祭りをみて感動し、札幌の学生100人と共に社会にぶつかって、'92年に第1回を参加10チーム・出場者1000人・観客20万人で開催された。昨年の第8回は、333チーム・34000人が踊り・観客200万人・経済効果200億円となり、なおも拡大しつつ、全国へ発信している祭りである。

— 出田建築事務所 代表 出田 吏市

### 砂地盤の液状化

「液状化」という言葉を、聞いたことがあるでしょうか？最近、「政局の液状化！」などとも使われているようです。その本家である「砂地盤の液状化」とは、「砂がせん断強さを失って液体のような現象を言います。液状化が発生すると、固いはずの地盤が液体のようになり、重いビルが沈んで傾いたり、軽いマンホールが浮き上がったりします。私が「液状化」に初めて接したのは、1990年のフィリピン地震の被害調査でした。当時、修士2年生であった私にとって、写真のような光景は衝撃的でした。あれが、きっかけで研究の道に進んだといっても過言ではありません。液状化は、以下の3つの条件が重なると発生します。



1. 緩い砂地盤  
2. 浅い地下水位  
3. 大きい地震

3つの条件のうち1、2は、臨海部の埋立地に多くあてはまります。(実際に、過去の地震では埋立地で液状化が多く発生しています。)

長野には当然ながら海がありません。「長野では液状化が起こらないのでは？」と思い、長野における液状化の歴史を調べてみました。すると、1847年善光寺地震では、千曲川や犀川の近辺で液状化が発生していました。長野でも液状化に対する備えは必要ようです。地震被害の根源のように呼ばれる液状化ですが、最近の研究により、必ずしも「悪」でないことが分かってきました。それは、液状化によって地震動が弱まり、建物の崩壊が免れるというものです。研究が進み、液状化の制御ができるようになると、「液状化が地震からあなたを守る…液状化免震！」が実現するかもしれません。

— 信州大学工学部 田村 修次

「酒」の語源をたどってみると、いくつかの説にたどり着く。説①:「酒=栄え水」が語源。「サカエ→サケエ→さけ」となった。説②:「栄えのキ」(キはお神酒のキ)が語源。「キ」が「ケ」となり、「ノ」が取れ、「カエ」がつまって「ケ」となり、「ケケ」が「ケ」となり「さけ」となった。説③: 酒を飲めば風寒邪気を避けることができる、つまり「さける」が語源。説④: 古語の「クシ」が語源。クシは「怪し」「奇し」の意味。木や石のくぼみに落ちた果物が自然発酵し、その液体を飲むと何ともいい気分になる、ことから酒を「クシ」と呼ぶようになった。などなど。

ワインやウイスキー、ビールなどが各国の気候や文化を背景として、人々の知恵が集結された結果生み出されたものであるのと同様に、酒も、その歴史をたどってみると、古く弥生中期から後期にかけて米麴を使った酒造りが始まり、奈良時代には各地に定着したといわれている。元来、酒は「マツリゴト」に利用され、飲酒は政治の場にとって重要な行事であり、現在でも冠婚葬祭等には欠かせない。いずれにせよ酒は神聖なものとして扱われてきたことが伺える。「酒」が一般市民も嗜むことができるようになったのは、奈良時代だといわれているが、それまでは、高級飲料としての扱いを受けている。さらに、16世紀に導入された十石入り仕込み桶により酒の大量生産が可能となり、酒は地酒(ローカルブランド)の時代へと移行していった。

さて、現在の蔵元数を調べてみると表のようになる。日本各地で「酒」が製造され、自分の好みにより選べるという、なんとも贅沢な時代である。長野、新潟は兵庫に続き蔵元数が多い。信州には旨い酒が多いとよく耳にするが、それは、水・米・気候などが優れているためと考えられる。旨い酒を後世に残すという姿勢は、伝統を受け継ぎ、自然を大切にする心に通じるという、やや強引な結論に達する。

県名	蔵元数
兵庫県	138
長野県	110
福島県	104
新潟県	103
岡山県	98
広島県	93
福岡県	93
山口県	79
愛媛県	74
京都府	71
愛知県	70
岐阜県	68
茨城県	66
三重県	65
滋賀県	63
山形県	61
埼玉県	59
奈良県	57
秋田県	54
福井県	54

— 信州大学工学部 長谷川 兼一



### 浅野川の風景

(金沢大学大学院・高橋 洋介)



福井城址お堀端・福井神社の照明デザイン(福井大学大学院・塚本 雅則)